

## No15 子どもとの良好な関係 - 信頼関係 - づくり

今回からは、特別な教育的ニーズのある児童生徒を支援する際の、心がけたい学級経営や学校経営についてテーマを設けていきます。今回は、指導の基本である「信頼関係」について特集します。

発達障害がある子にかかわらず、すべての児童生徒において子育てや教育の土台となるものは、大人との信頼関係をしっかりともてることです。信頼関係をもてない中での指導の効果は期待できません。

子どもは、自分のことを分かってくれる存在、自分を一人の人間として認め、信じてくれる人を信頼します。一人の人間として認めるといことは、甘やかすということではなく、よい所を認めながら、いけないことは「こうすればいいよ」ときちんとして教えることでもあります。

信頼関係を築くためには、次のような基本的なことから取り組んでみるとよいと思います。

## 1 信頼関係の基礎（子どもの見方）

・いわゆる「困った子」「どうしてこんな子が」という見方をしているうちは、子どもは決して信頼を寄せてくれません。

・「一度にいろいろな情報を整理することがとても苦手なのかな」「うまく遊びたいのだけれど、自分の言動が上手に統制できないのかな」などと、具体的に子どもを見ていくことで子どもを見る目が大きく変わっていきます。  
 ・「なぜこんなことができないのか!」「なぜわからないのか!」から、  
「どうしてもうまくできない部分もあるのだ」「どこに発達のアンバランスさがあるのだろうか」「どうすれば分かるようになるのだろうか」などと、  
 子どもの見方・自分の考え方を転換していくことが大切です。

## 2 信頼関係を築くための方策

- (1) 苦手な部分を具体的にサポートする。
- (2) 子どもの姿を多面的にとらえる。
- (3) 得意な部分を見つけ、できる限り伸ばす。
- (4) 保護者や周囲の子どもに、その子が努力していることや変わったところを伝え、周囲の見方を変えていく。
- (5) みんなで認める。

- (1) 子どもにとってうれしい実感を伴う支援とは、ただ「頑張れ」と励まされることより、どうしたらうまくいくかを具体的に実際に即してサポートしてくれることです。(視覚的な認知が弱い子には、読む以外のところを隠すしおりなどの利用を教えてあげたり、資料を拡大してあげたりする等)
- (2) 専科の時間、休み時間など、場所や人が違った時には教室と違う姿が見られます。専科や養護の先生方と連絡を密にしたり、休み時間一緒に遊んだりすることで、子どもを多面的に捉え直すことが出来ます。
- (3) よいところを認められて初めて自分のよいところに気づき、自信をもつことができたとしたらそれはとても強い信頼感につながります。
- (4)(5) 好きな事は人一倍、一生懸命にやる子がいます。周囲が面倒がるような仕事でも、こつこつとやる姿は友達も一目おくことになります。その子の特性を生かした故意的な教師の働きかけが、功を奏することになるものです。

## &lt;指導のポイント&gt;

保護者が担任や学校へ不信任をもつことにより、子どもとの信頼が揺らぐことがよく見られます。問題を一方的に指摘するのではなく、本当に困っていることを1つか2つだけに絞り、実現可能な具体的な解決策と目標を提示しながら親と一緒に取り組んでいく、というような努力をとおして信頼感を高めていくことが大切です。

